

183. 平成2年度滋賀県下に おける発掘調査の紹介 その1

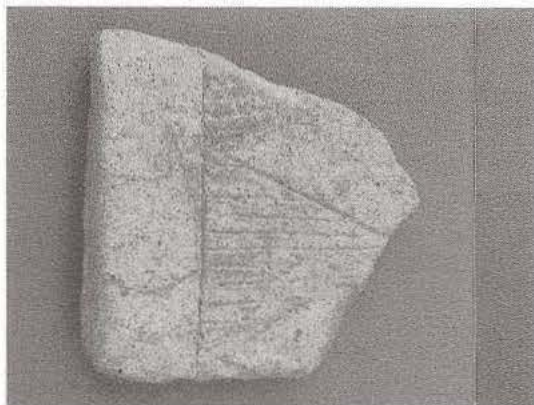
平成3年3月2日、恒例の県下発掘調査スライド大会（第57回滋賀県埋蔵文化財センター研究会）が滋賀県埋蔵文化財センターで実施されました。

今年度も県下では、多くの発掘調査が実施され、貴重な成果を上げています。ここにその成果の一部ではありますが、調査発表を紹介いたします。

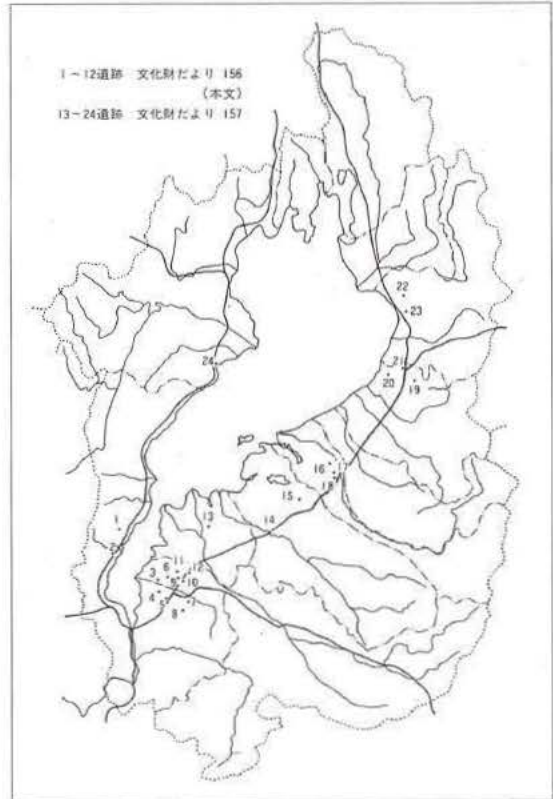
今後の参考として活用いただければ幸いです。尚、御多忙の中、御協力いただきました方々に厚く御礼申し上げます。

1. 木の岡車塚古墳から埴輪を発見 大津市木の岡 木の岡車塚古墳

木の岡古墳群は、JR西日本湖西線叡山駅の北東方約1kmの比叡山から琵琶湖に向かって派生した木の岡丘陵地に営まれた古墳時代中期の古墳群である。当古墳群は、全長84mの前方後円墳である茶臼山古墳、全長75mの帆立貝形古墳である本塚古墳、直径約20mの円墳である首塚古墳・御前塚古墳・新塚古墳など計6基で構成されている。今回、発掘調査の対象となった車塚古墳は、この丘陵地の南方約500mの平地部に築かれた直径約25m、高さ約2.0mの円墳である。当古墳の南西方約50mには、車塚古墳と同規模の円墳・鹿道古墳が存在し、平野部に並立して築かれた2基の円



形象埴輪片



遺跡位置図（位置図の番号は本分と同じです）

墳として注目されていた。また、当古墳群は、古くから知られており、そのほとんどが陵墓参考地として指定されていることから、立入ることができず、その墳丘規模・内部構造は不詳なまま現在に至っていたのである。そのような状況のなかで、当古墳の東方に隣接する水田中（周濠推定地）に宅地造成が計画されたことから事前に発掘調査することとなった。調査の結果、古墳の墳丘・周濠等の遺構は、12～17世紀頃の削平によってすでに破壊されていたものの、わずかに葦石が崩落した痕跡を確認することができた。また、それらの葦石中に混入して埴輪や12～17世紀の土器類が出土した。出土遺物は、黒斑をもつタテハケ調整の円筒埴輪や盾・馬などの形象埴輪片があり、12～17世紀のものは、土師器皿・灰袖陶器椀（黒笹14号窯）・中国福建省泉州窯筆架山童子山1・2号窯の洗（盤）などの輸入陶磁器などもみられた。

以上のことから、木の岡車塚古墳は、墳丘の形態・周濠の有無など不詳なもの、おそらく古墳時代中期前半頃、5世紀前半頃に築造されたものと推定された。
(大津市教育委員会 吉水眞彦)

2. 切妻大壁造り住居跡検出

大津市見世 滋賀里遺跡

本遺跡は、滋賀里一・二・四丁目、見世一・二丁目、際川二丁目、蓮池町に所在し、標高90～109mの複合扇状地先端部に立地する縄文時代から中世にかけての大規模な複合遺跡である。

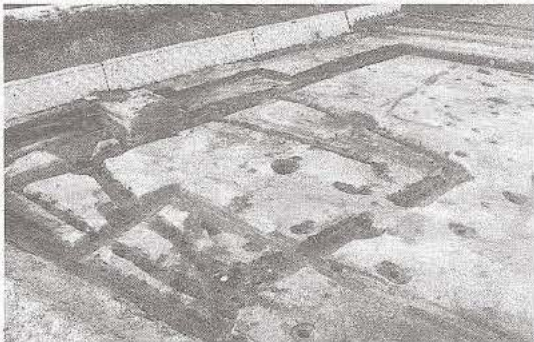
調査は、国道161号線と西大津バイパスを結ぶ都市計画道路建設に伴うもので、延長約330m、約6,500㎡を対象としている。今回報告するのは、このうち京阪電鉄石坂線の東隣の地点で、調査面積は約1,450㎡である。

調査の結果、6世紀後半～7世紀前半の竪穴住居跡1棟、切妻大壁造り住居跡1棟、掘立柱建物跡4棟などを検出した。

切妻大壁造り住居と呼ばれている建物跡は、一辺約10mの隅丸方形を呈し、幅0.5～1.0mの溝が柱の掘方となっている。この溝は、東辺で一部途切れる。この間の距離は、0.9mを測る。この部分が入り口になるものと考えられる。溝の深さは、0.4～0.6mで、南辺と北辺の中央部が外側に約0.5m張り出す。柱の直径は10cm前後で、25～80cm間隔で溝の内側に寄せて立てられている。また、東辺に平行して3間分の柵を検出した。柱間距離は、2.7m等間である。建物方位は、東・西辺でみると東へ約18度振っている。時期は、出土遺物から、6世紀末～7世紀初頭頃と考えられる。

以上が切妻大壁造り住居と呼ばれている建物跡の概要である。今回の調査で検出したこの住居の特徴は、棟持ち柱が立つとみられる南辺と北辺の中央部が外側に張り出すことと、ほとんどすべての柱が溝の内側に寄せて立てられていることである。棟持ち柱だけ壁の外側に立てられるのであろうか。

(大津市教育委員会 栗本政志)



切妻大壁造り住居跡（南東から）

3. 弥生～中世の複合遺跡

草津市下笠町 馬場遺跡

馬場遺跡は、葉山川が形成した東西に伸びる自然堤防上に立地する弥生～鎌倉時代にかけての遺物散布地として知られていたが、昨年度、当該地において予定されている圃場整備事業に先立ち実施した試掘調査によって柱穴等の遺構が確認されたため、今年度当初より調査を実施しているものである。

調査の結果、带状にのびる自然堤防上の東側には、平安末～鎌倉初期にかけて形成された集落跡、西側の老杉神社周辺では弥生後期～奈良時代にかけての集落跡がそれぞれ検出され、集落の移動が西から東に行われたことを確認した。特に東側の集落跡は、以前、低湿地であった地形を厚さ40cmの客土などの土地改良を行なっている。集落からは黒色土器、土師器、須恵器の他、多量の瓦器や輸入陶磁器、石鍋等の遺物も出土するなど、近隣の集落遺跡とは異なる様相を呈する。遺構としては、掘立柱建物および溝跡、土坑等が検出されている。この内、S B-203と呼称する建物は一辺1m強の方形掘方中に、直径30cm弱、長さ1m強の柱が遺存する。当該建物は、調査区の都合上2×1間のみしか検出できず、全体規模は不明であるが、S B-203と直交する形で同様のS B-202も検出されるなど、周辺に大型建物群の存在する可能性が指摘できる。

当該建物は粟太郡主条理に合致し、掘方内部から瓦器片が出土していることから、周辺の建物群と同時期と考えられ、中世初期における馬場遺跡の特異性を一層裏付けるものとして注目される。

今回の調査は道路、水路及び若干の切土部を対象としていたため、遺跡全体の規模の把握にまでは至らなかったものの、中世初期における社会状況等を考える上で、馬場遺跡が持つ意義は大きく、今後の調査が期待される。

(草津市教育委員会 小宮猛幸)



S B-203断割り状況（西から）

4 平安時代のカラスキが出土

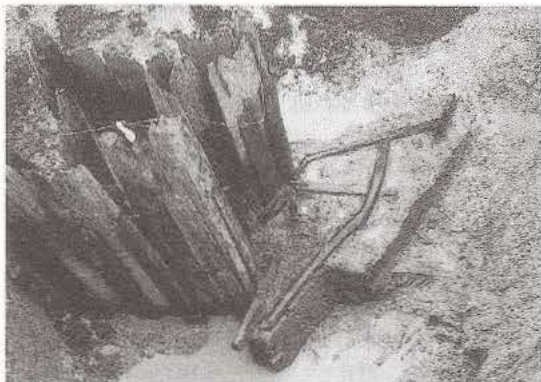
草津市矢倉 中畑遺跡

中畑遺跡は草津市矢倉一丁目周辺に所在する。今回の調査は新草津川河川改修に伴うもので、調査面積は約3,500㎡である。

調査地は瀬田丘陵から派生する舌状丘陵地の先端部付近に立地する。調査の結果、古墳時代前期の竪穴住居跡、7世紀中頃の溝跡、8世紀～11世紀の掘立柱建物群、9世紀～11世紀の井戸跡4基等が検出された。掘立柱建物には近接する矢倉口遺跡や岡田追分遺跡と同じく南北方位をとる一群があり関連が窺われる。

カラスキは作り替えがある井戸の再構築時の井戸掘方底付近から出土したもので、掘方が井戸枠の大きさに比べて異様に大きく、井戸枠を掘方の片側に寄せて設置していることから、井戸再構築時に意図的に掘方内に埋められたものと考えられる。井戸枠内からは土師器皿・緑釉陶器等の土器類とともに、齋串・横楯・鋸形木製品・庖丁形木製品などが出土し、時期については11世紀前半代に比定できる。掘方内からもほぼ同時期と考えられる土器片が出土しており、井戸の作り替え・カラスキ埋置についても11世紀前半におこなわれたものとみられる。カラスキはスキ先およびへら部分については失われていたが、木部については完全な形で遺されており、全長約2.25mを測る。当カラスキの特徴はスキ柄部分からスキ床部までが一木で作られていることである。このような一木造りの類例は、大津市坂本の聖衆来迎寺所蔵国宝『六道絵』（鎌倉時代）の絵画表現や、大津市田上郷土資料館所蔵の民俗資料（時期不明）等にみられる。民俗資料を除いて完形のものには他に例がなく、またこれまでに平安時代のカラスキ出土例は無かったことから、今回の出土は農業史、特に牛馬耕の発展を考えるうえで貴重な資料を提供することとなった。

((財)滋賀県文化財保護協会 平井美典)



カラスキ出土状況

5. 中世以降の多数の井戸跡を検出

草津市矢倉・西矢倉 中畑遺跡

中畑遺跡は、草津市矢倉一丁目から西矢倉二丁目にかけて広がる集落跡で、草津川改修事業に伴い、県教委と草津市教委とで調査区を分担し、調査を実施した。

市教委の調査区は、JR東海道線を挟んで、東西2地点に分かれ、それぞれ東地区、西地区とした。調査は東地区より着手し、その結果、中畑遺跡の中心を占める奈良～平安時代の遺構は、調査区の南西隅でしか認められず、大半は中世以降の遺構であった。

その中で注目されたのは、調査区の全域にわたって分布する15基の井戸跡群であった。このうち数基は、鎌倉時代に遡り得るが、残りは近世以降のもので、最近まで使われていたと考えられる野井戸も確認された。井戸枠が残存していたのは2基で、1基は曲物の枠が井戸底部に一段だけ残っていた中世の井戸跡である。残る1基は、縦板を丸く巡らせた桶状の枠を持つ近世のものと考えられる井戸跡である。

当調査地に井戸跡が多いのは、東側に隣接して旧東海道が走っており、この街道沿いに長い期間にわたり集落が展開したため、多くの井戸が構築されたものと考えられる。

続いて西地区の調査に着手したが、当調査区では遺構が北寄りにしか存在せず、そのうえ西端では低温地となって全く消滅してしまうため、当該地が中畑遺跡の南西端にあたるのが判明した。ここで検出された遺構は、古墳時代～平安時代の溝跡、土坑、掘立柱建物跡等で、かなりの密度で集中していた。当調査地のうち、遺構の検出されたのが部分的であるため、遺跡の性格を把握するまでには至らなかった。なお、当遺跡は調査地の北側へ広がって行くものと推測される。

(草津市教育委員会 藤居 朗)

6. 中世の屋敷跡と近世の貯水施設

栗東町霊仙寺 霊仙寺遺跡

霊仙寺遺跡は、栗東町の北西部に位置し、縄文時代中期及び、縄文時代晩期から弥生時代中期を中心とする遺跡として周知されている。

今回の調査は、宅地造成に伴う事前調査で、弥生時代中期から江戸時代以降にかけての遺構が確認された。中心となる遺構は、平安時代後期の遺構で、区画溝をもつ屋敷跡である。区画溝は、残りのいい部分で幅1.2～1.6m、深さ20～60cmを測り、南北方向には、2本の溝が並行してのびている。区画溝内及び周辺には、3棟以上の掘立柱建物、井戸、土坑等が確認されている。井戸や土坑のいくつかは、意識的に石を使って埋められた痕跡が認められる。また、注目される遺物として



江戸時代の貯水施設

「殿島」と墨書された土師器碗、篠系と思われる須恵器碗等が出土している。

江戸時代以降のものとしては、井戸、溝、貯水施設、耕作痕等がある。なかでも貯水施設は、枠自身の大きさが約4×3mで、掘方も含めると9m程の大きなものである。深さは、検出面より約2.3mを測る。枠の構造は、上下2段に組んだ丸太材を、四方に立てた柱に組み込み、その外側には、板材を南北方向に14枚、東西方向に10枚ずつ並べ、隙間を竹で埋めている。また、下方に組んだ丸太の下には、厚さ約10cm、幅約30cm程の板を東西方向の両側にもち、その下の南西隅に曲物を設置している。貯水施設の年代は、出土遺物(信楽、瀬戸・美濃、肥前系の陶磁器類)から、17世紀代のものと考えられる。用途としては、井戸と同様な使用方法の他、種籾を水に浸すための、共同の種池等、さまざまなことが考えられる。類例としては、当遺跡例よりもやや大きいものであるが、栗東町総遺跡で検出されている。管見の限りでは、他に類例を知らないため、このあたり一帯の独特な貯水施設であった可能性もあろう。

((財)栗東町文化体育振興事業団 近藤 広)

7. 奈良時代の墨書土器が出土

栗東町安養寺 狐塚遺跡

狐塚遺跡は、野洲川により主に形成される複合扇状地上にあり、縄文時代から中世にかけての複合遺跡として周知されている。

調査は、字狐塚地区において独身寮建設に伴い約300㎡の範囲で実施した。主な遺構には、縄文時代の沼沢地・土坑、古墳時代以降の溝、奈良時代の井戸・土坑・ピットがあり、包含層からは古墳時代から中世の土器のほか、剥片・円筒埴輪片も出土している。

奈良時代の井戸は掘方の直径が約170cmで、井戸底には内法が68×54cmの井桁に組んだ枠が1段のみ遺存し



墨書土器が出土した井戸

ていた。井戸の埋土は枠内が腐植土、枠の上から遺構面下約80cmまでは人為的な埋土、上層は埋め立て後の自然堆積である。墨書土器が出土したのは枠内の腐植土層で、ほぼ完形の土師器・須恵器坏身6点、匙形木器1点、不明木製品1点、先端が焦げた木片2点が、20~40cm大の石とともに一括で出土した。土器のうち3点に墨書が認められ、須恵器に「上乙」、土師器に「大殿」「上乙」と書かれていた。遺物の年代は8世紀前半と考えられる。井戸の祭祀に関連するものであろう。

本遺跡は、栗太郡街と推定される岡遺跡と、白鳳寺院が想定されている手原廃寺とのほぼ中間地点にあたり、古代の街道にも近接すると考えられる。今回出土した墨書土器からは、本遺跡周辺にも官人層の居住が窺え、役所や街道と関連した律令制期の遺跡の広がりを考えるうえで、貴重な資料である。

((財)栗東町文化体育振興事業団 雨森智美)

8. 地山古墳の墳形・規模等に新知見

栗東町岡 岡遺跡・地山古墳

岡遺跡は栗東町岡・目川に所在する。団体営圃場整備事業に伴い、1986年から調査が継続して実施されており、今回の第5次調査は、栗太郡街跡の西側に隣接する地山古墳周辺地域で約2,600㎡の調査を実施した。

地山古墳は従来直径56mの円墳と周知されていたが、調査により帆立貝形の前方後円墳であるという新知見を得た。墳丘規模は、後円部直径66m、前方部の長さ22m、幅33mを測り、周濠は最大幅15m、深さ2mで、墳丘にそう形で検出された。

現存する墳丘は削平を受けており、葦石、埴輪等の存在は知られていなかったが、各トレンチから葦石と埴輪を検出した。埴輪は軟質・有黒斑のもののみで、円筒埴輪の他、家形と思われる形象埴輪片も出土している。しかし、どれも転落した状態での検出である。古墳の築造年代は、出土した埴輪から5世紀前半と



前方部より後円部を望む

考えられる。

また、地山古墳の南東約25mの調査区では、幅5m、深さ0.5mの弧状を呈する溝の一部を検出した(2号墳)。

部分的な調査のため全体の規模は不明であるが、溝の埋土からは多数の埴輪片を検出した。埴輪は円筒埴輪の他、家・蓋・鶏などの形象埴輪も出土している。これらは、地山古墳と同様すべて軟質で、黒斑を有するものであるが、円筒埴輪の特徴を見ると、タガの突出度が高く、方形の透し孔をもつなど地山古墳出土のものとは比べ古い様相を示している。

その他、地山古墳及び2号墳周辺の調査区では、7世紀から13世紀にかけての掘立柱建物、溝、井戸、土坑等を確認した。また、地山古墳の墳丘裾部では、近世の陶磁器片と共に、多量のとらんや、さや等の窯道具が出土しており、この地域で窯業生産が行われていたという伝承を裏付ける発見となった。

((財)栗東町文化体育振興事業団 佐伯英樹)

9. 中近世の集落跡

守山市二町 二町鏡遺跡

二町鏡遺跡は守山市の南端に位置しており、過去の調査で弥生時代中期の方形周溝墓や平安時代後期の集落が検出されている。今回の調査は都市計画道路(二町一播磨田線)の改良工事に先立つもので、新たに室町時代から江戸時代前期の集落が発見された。



石臼出土状況

集落はほぼ現況地割りに合致する幅3~4m、深さ1m程の溝で区画されており、現状で4区画の屋敷地が確認できた。南端の区画溝に隣接して現河川(流路)があり、ここから溝に取水していたとみられる。確認調査の結果、これより南からは遺構が検出されず、この河川が集落の南端と考えられる。区画内からは多数の柱穴と井戸が検出され、市内で発見されている横江遺跡や杉江遺跡と同型の集落とみることができる。

耕作土直下から遺構面直上にわたっては江戸時代前期の包含層がみられ、伊万里の碗・皿、瀬戸の鉢、信楽のすり鉢、石臼などの遺物が出土した。

(守山市教育委員会 宮下陸夫)

10. 弥生時代後期から古墳時代にかけての集落跡

守山市伊勢町 伊勢遺跡

守山市の東南部にあたる伊勢町において倉庫建築に先立ち、約600㎡を対象に発掘調査を実施した。その結果弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落の存在を確認した。検出した遺構は、竪穴住居8棟、溝2条、掘立柱建物2棟、土坑2基である。竪穴住居はすべて方形プランを呈するもので、一辺4~8mを測る。これらの住居は建て替えや切り合い関係が認められ集落の継続期間として一定の時間幅が見込まれる。住居から出土した土器から弥生時代後期末から布留式にかけての年代が与えられる。これらの住居は人工溝を切って作られているが、溝内からは弥生後期の長頸壺などが出土している。このほかに2棟の掘立柱建物が検出されたが、内1棟は1間×2間の規模で竪穴住居と同時期である可能性がある。他の1棟は2間×3間の建物で柱穴内から出土した土器から鎌倉時代の年代が与えられる。

調査地の西側には東西方向に伸びる旧河道が検出された。この河道は竪穴住居を切って流れているが、それが埋まった後に鎌倉時代の建物が立てられている。このことから弥生時代後期から古墳時代前期にかけて



弥生後期の竪穴住居

集落が営まれた後、これを切って河道が流れるようになり集落は1度断絶したものと見られる。その後、長い時間をかけて河道が埋まったのち鎌倉時代に再び集落が営まれるようになったと考えられる。

(守山市教育委員会 伴野幸一)

11. 銅鐸飾耳、小型仿製鏡が出土

守山市古高町 下長遺跡

下長遺跡、守山市古高町地先の田畑、工場地に所在する縄文～平安時代にかけての集落跡として周知されている。工業団地造成工事に伴い、平成元年4月から2年10月まで2ヵ年にわたり約21,000㎡を調査した。

その結果、縄文時代晩期、弥生時代中期、弥生時代後期、古墳時代前期、平安時代中期の多時期に及ぶ遺構と調査地中央を概ね南北に流れる旧河道を検出した。このうち縄文時代、弥生時代中期の遺構は、旧河道右岸で河岸部から一定距離をおいて限定された範囲に分布し、平安時代の遺構もその2時期に重複するように散在し、一過的な様相を呈する。一方、弥生時代後期、古墳時代の遺構は旧河道兩岸に高い密度で認められる。特に古墳時代前期に属するものは河岸間際まで広がっており、河道の衰退を窺うことができる。

今回の調査で得た知見としては、弥生時代中期において竪穴住居とともに掘立柱建物が存在し、古墳時代前期の段階には掘立柱建物で構成される集落に移行したこと。そして竪穴住居は弥生時代中期と後期～古墳時代初頭の時期がみられ、後者の住居については弧状の小溝が伴うことである。また、特筆すべき遺物については昨年度に旧河道からやまと琴、柄頭をはじめスキ、クワ、杵、桶など農具、祭祀具、建築部材と多種にわたる木器を得ているが、2年度調査では、既に報告しているとおり双頭渦文の銅鐸飾耳、小型仿製鏡や直弧文を施す柄頭、初期須恵器、韓式土器が旧河道際の溝から出土した。

当遺跡の既往調査は過去2件、縁辺部で実施されて



出土した銅鐸飾耳(寿福写房提供)

きたが、3年度も新たに実施が予定され、この一連の調査によって、その実態解明は大きく前進する。

(守山市教育委員会 岩崎 茂)

12. 古墳時代前期の方形周溝墓群の調査

守山市今宿町 経田遺跡

平成2年5月から民間の宅地造成工事に先立ち、約2,500㎡を対象に発掘調査を実施した。今回の調査は第3次にあたり、これまでの調査では縄文時代中期の土坑や土器、石器、弥生時代後期の竪穴住居、溝、方形周溝墓、古墳時代前期の方形周溝墓、同後期の掘立柱建物、古墳跡など多数の遺構が検出されている。今次の調査もほぼ同様の遺構の存在が予想され、調査の結果も古墳時代の遺構で占められた。

さて、検出された遺構では、古墳時代前期の方形周溝墓7基、古墳時代後期以降の掘立柱建物2棟、大溝1条がある。以下、特徴をもつ方形周溝墓について略



方形周溝墓

報しておこう。全容が把握できるのは中央で検出された2号、3号墓で、台状部の一辺が9mの方形をなし、周囲に2～3mの浅いU字状の溝を巡らせている。西側にあたる辺のほぼ中央が陸橋部をなして、溝の幅も広く、2号、3号とも同様の陸橋部のあり方をみせた。他の周溝墓のうち、7号は四辺が独立する溝から成るが、残る4基は西辺が確認されないため不明である。2号墓ではこの陸橋部の直ぐそばの溝内に供献土器が、3号墓も他の辺に供献土器がみられた。4号墓では南辺から山陰系と考えられる器高80cmの大型壺が供献されていた。これまでに10基を越える周溝墓が検出されており、墓城の構成に特徴を有した遺跡である。今後さらに分析を深めたい。

(守山市教育委員会 山崎秀二)